伝わる自信を育むカタカナ式英語発音からの脱却

Building Confidence by Overcoming Japanese ***katakana*** Accent

阿佐美　敦　子

実践女子大学人間社会学部
紀　要　第18集　抜刷
2022年 3 月 31 日発行

研究論文

伝わる自信を育むカタカナ式英語発音からの脱却

Building Confidence by Overcoming Japanese *katakana* Accent

阿佐美敦子
Atsuko ASAMI
実践女子大学人間社会学部

はじめに

異文化間コミュニケーション能力の獲得が、一部の層ではなく全ての青年に求められる今、日本と歴史的関りの深いフィリピンの次代を担う学生たちと筆者が担当するコミュニケーション系学生たちが、スカイプを通じて交流し、共に第二言語である英語を用いていかに有効に互いの文化を発信し、理解しうるか、異文化への気づき、文化の共有の可能性について検証することを目的とした取り組みを始めたのは 2014 年度であった。続けて 2015 年度、2016 年度と、それぞれ 3 回のプレゼンテーション交換を実施し（各年度共 10・11・12 月）、交流そのものは極めて友好的に展開され、資料の準備や発表の練習に時間をかけた結果、両大学の参加学生の事後エッセイによれば、相手の文化に対する理解を得たと同時に自文化を伝えることのできた喜びを感じたという感想が数多く寄せられた。

一方で日本人学生による発表の間、またフリーカンバセーションの間、フィリピン人学生の反応が止まり、双方が戸惑うという場面も少なくなかったが、原因は前者の英語発音が本来の英語のそれでなくカタカナに置き換えて発音しているためであった。後者は幼少から英語に親しみ、ほぼ全ての学校教育を英語で受けており、彼らの英語力はネイティブのそれに引けを取らない。そして彼らはそれまでの暮らしの中で日本人と話す、交流するといった機会はなく、従って一般に日本人が英語を話す際に聞かれる特徴について一切の知識を持たないので、前者が話すカタカナ式発音を英語の音としてキャッチできず、フリーズせざるを得ないのだった。

この 3 か年については、各年度共に海外留学経験者や帰国子女が複数名含まれており、自然と交流のリードは彼らに任せられる形となって、それ以外の学生たちは自分の英語発音に自信が持てず、ついつい口ごもってしまうというネガティブな結果をもたらしたことも事実であった。ところが 4 年目に当たる 2017 年度ではリードができる学生が一人もおらず、全員が中級話者にもやや及ばない程度の英語力であったため、後期授業の始まる 9 月下旬から交流の終わる 12 月中旬まで英語の発音指導を行い、各自が一定の自信を持つことができ、指導法は好評を得たと言える。

これを踏まえて次年度から 3 か年、筆者が取り組んだのは、より体系的な発音指導をより長期

に行うことであった。それにより、NS に近いまでとはいかずとも、外国人に負担なく聞き取ってもらえるだけの正しい英語発音のスキルを学び、日本を紹介し、わかってもらえる、喜んでもらえる、嬉しい、という体験を重ねることで、自分の発音に自信を持ち、不安なく話せる、積極的に話す態度を獲得し、さらなる学習意欲を高めることを目的とした。

研究の目的

初級から中級レベルの日本人英語学習が体系的な英語発音指導を受けることによって、発話の苦手意識を克服し、自信力・学習意欲を向上させ得るかを検証する。

研究対象者

2018 年度、2019 年度、2020 年度において、筆者の担当するコミュニケーション系大学 3 年生（女子）、各年度 11 名、計 33 名で、CEFR A2 から B1 に相当する英語力を有する。

調査期間

3 か年共、4 月～12 月に実施し、その内、10・11・12 月には各 1 回 120 分程度のリモートによる交流をフィリピンの大学生と行った。

調査方法

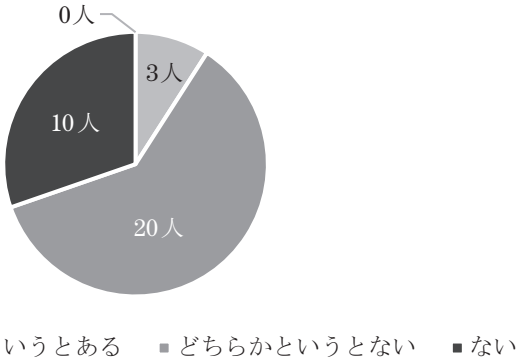
事前調査として、自身の英語力・英語発信等に関わる意識調査を質問票を用いて行い、事後調査との変化を評価する。また、CAN-DO Statement を用いたセルフアセスメント調査を事前事後に行い、変化を評価する。

対象者にはまず、発音記号を理解し、できる限り正しい発音ができることを目指して個々の音の特徴、発音の仕方を一音、一音解説し、発音記号で示した比較的単純な単語を読めるように指導する。次の段階では、正しい位置に適切な強さのアクセントを入れることを意識させ、単純な単語から比較的複雑な単語までを反復練習させる。さらに次の段階では、短い文を正しいリズムで話すことを目指して反復練習させる。最後の段階として、正しいイントネーションで話すことを目指して反復練習させる。指導は全て、グループと個別の両方を用いて行い、グループに対して解説をした上で、個別に発音の矯正をするという形で行った。

調査結果

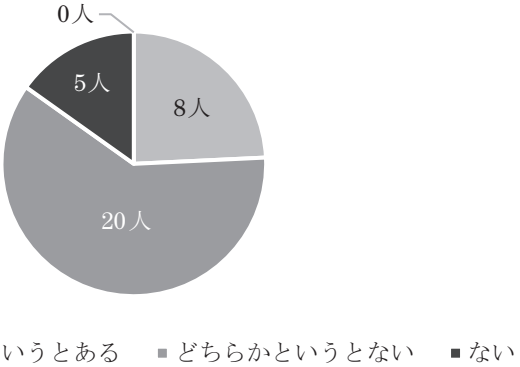
実施前意識調査（n = 33）

1 これまでに学校教育において個別発音指導を受けたことがある。



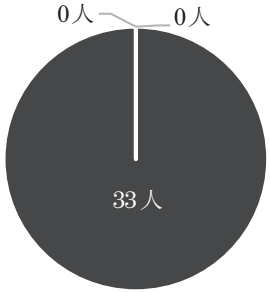
図表1

2 自分の英語発音は外国人に通じる自信がある。



図表2

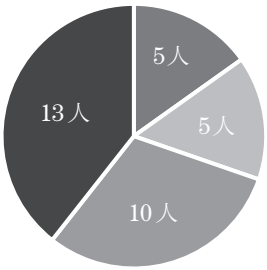
3 発音記号を理解している。



■している　■どちらかというとしている
■どちらかというとしていない　■していない

図表 3

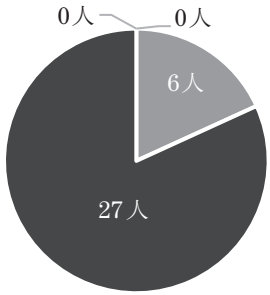
4 先生以外の外国人と英語で会話する機会がある。



■ある　■どちらかというとある　■どちらかというとない　■ない

図表 4

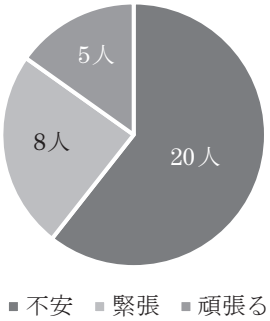
5 日本文化について英語で話をする機会がある。



■ある　■どちらかというとある　■どちらかというとない　■ない

図表 5

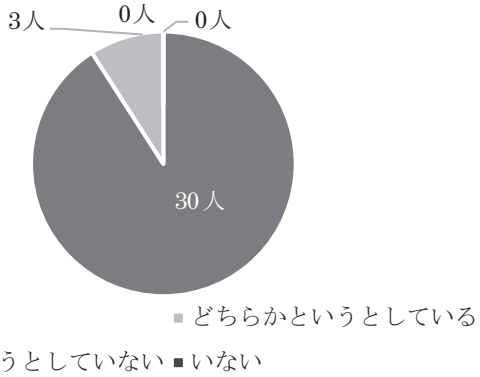
6 英語でのプレゼンおよび交流を控えた今、一番強く感じる気持ちを一言で表してください（自由回答）。



図表6

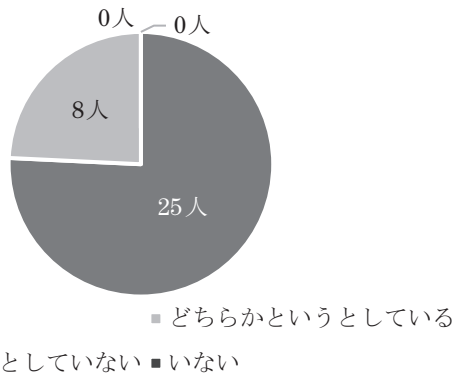
実施後意識調査（n = 33）

1 カタカナ英語と実際の英語の違いを理解している。



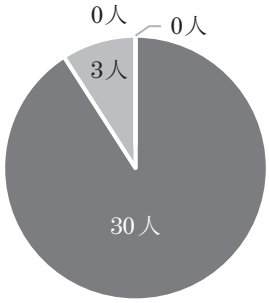
図表7

2 発音記号を理解している。



図表8

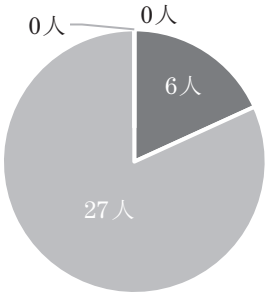
3 自分の英語発音は外国人に通じる自信がある。



■ある　■どちらかというとしてある　■どちらかというとない　■ない

図表 9

4 交流を通じて英語による日本文化の紹介に自信が持てた。

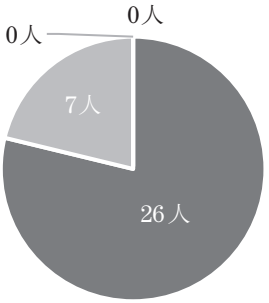


■持てた　■どちらかというと持てた

■どちらかというと持てなかった　■持てなかった

図表 10

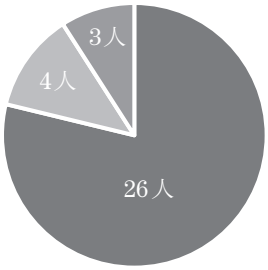
5 訓練によって得られた英語発音を維持、向上させたいと思う。



■思う　■どちらかというと思う　■どちらかというと思わない　■思わない

図表 11

6 英語でのプレゼンおよび交流を控えた今、一番強く感じる気持ちを一言で表してください（自由回答）。



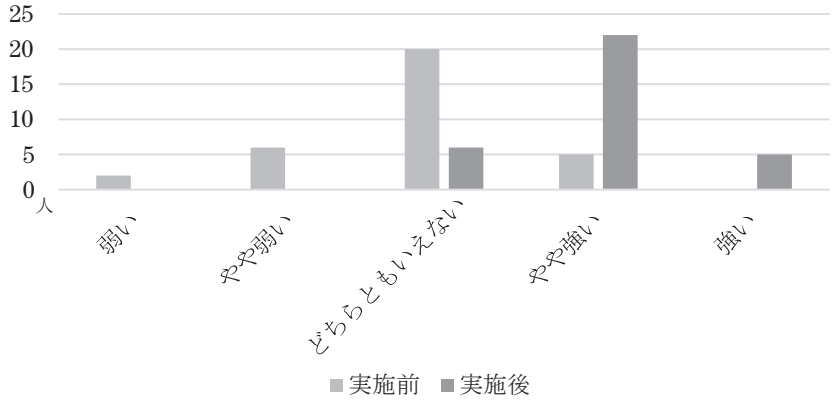
■楽しかった　■面白かった　■感謝　■

図表 12

以上の結果から、実施前においては発音について特に指導を受けた経験のない者がほとんどで、発音記号についての知識もなく、従って自分の発音に自信が持てていなかった事実がわかる。日頃は日本文化について話す機会がないと答えた者が 27 名、どちらかというとないと答えた者が 6 名で、機会は少ないことがわかった。こうした要因から、語による交流に対して「不安」「緊張」を抱えているものが 28 名に及んだことは当然と言える。尚、質問で「先生以外の外国人と英語で会話する機会がある」にあると答えた者が 5 名、どちらかというとあると答えた者が 5 名いたが、ヒアリングによれば主にアルバイトで外国人に接客する必要があるとの理由からだった。実施後においては、回答は極めてポジティブな意識が見える。発音訓練を通じて、カタカナ式の発音は英語ではことを認識でき、発音記号をほぼ正しく理解している。交流では積極的に話すよう心掛け、自身の英語が通じると実感できたことにより、日本文化の紹介にも自信が持てた。それゆえに、交流後の感想では「楽しかった」が最も多く、事前調査での不安が消え、今後も英語発音を向上させていこうという前向きな回答が得られた。

実施前・実施後セルフアセスメント結果（n=33）

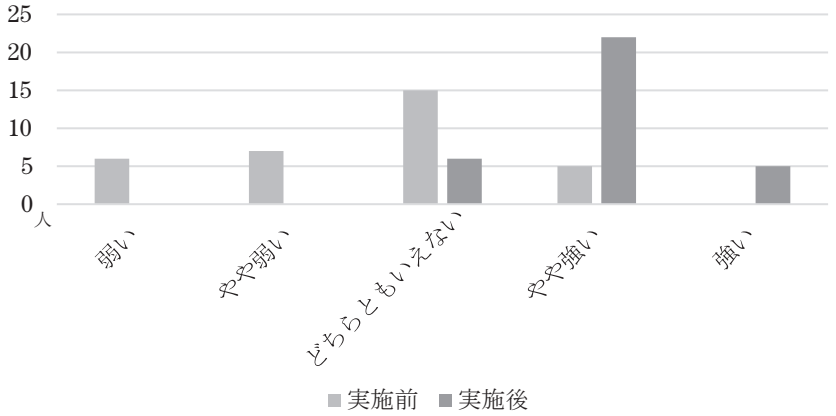
1 簡単な発言をすることができる。



図表 13

実施前では「どちらともいえない」が最多であったが、交流におけるフリーカンバセーションの場面では積極的に発言することが求められたため、「やや強い」にシフトができたと思われる。

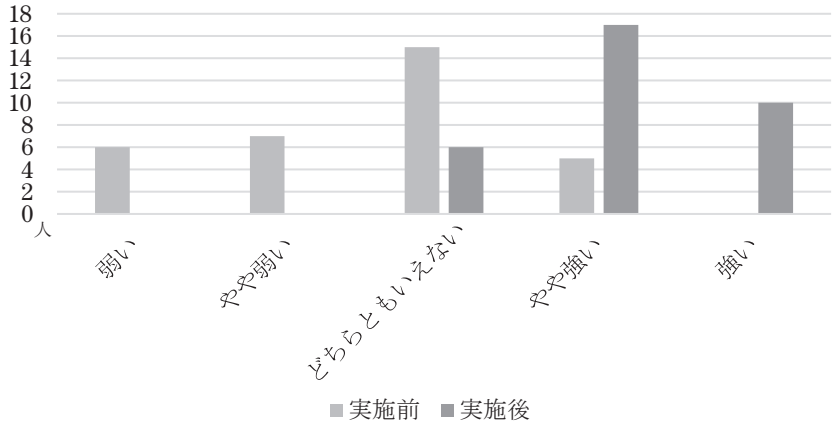
2 買い物で店員に自分の好みを伝えたり、質問ができる。



図表 14

交流期間中に実際に買い物で英語を話したわけではないだろうが、話す体験を積むことで自信を持つことができたと思われる。

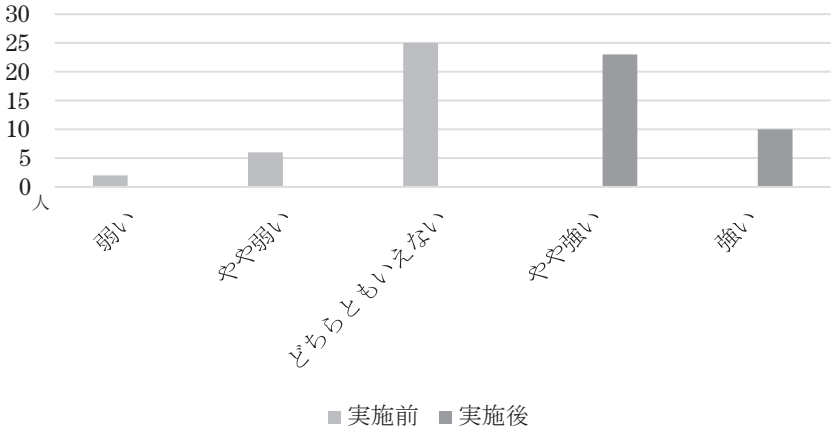
3 簡単な道案内や路線の案内ができる。



図表 15

質問 2 の回答と同様に、話すことへの自信の表れと思われる。また、本学は外国人観光客が非常に多いエリアに在しており、登下校時に積極的に話しかけ、道案内等、助けられるように努めるよう促したため、実際に成果が上がったことも一因である。

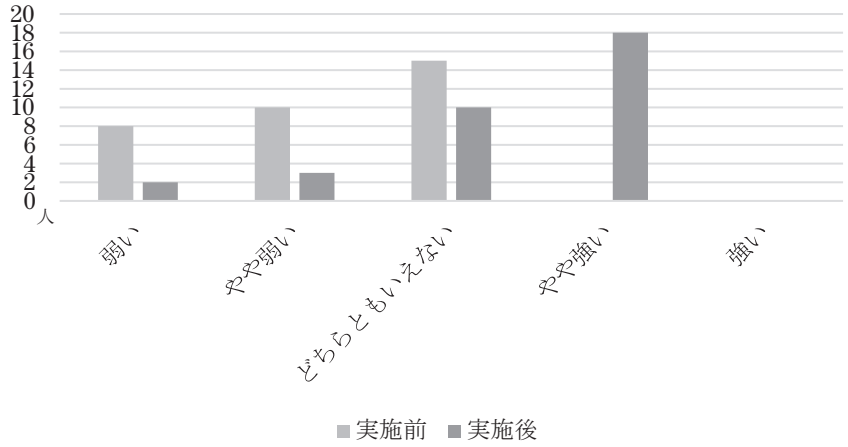
4 自分について簡単な紹介をすることができる。



図表 16

交流の初回では、自己紹介の時間を十分に設け、互いがどのような人物なのかを知り、親交を深めた上でプレゼンテーションに入るようにしたため、自分について相手に理解してもらえるように話す訓練はしっかりとできていた。

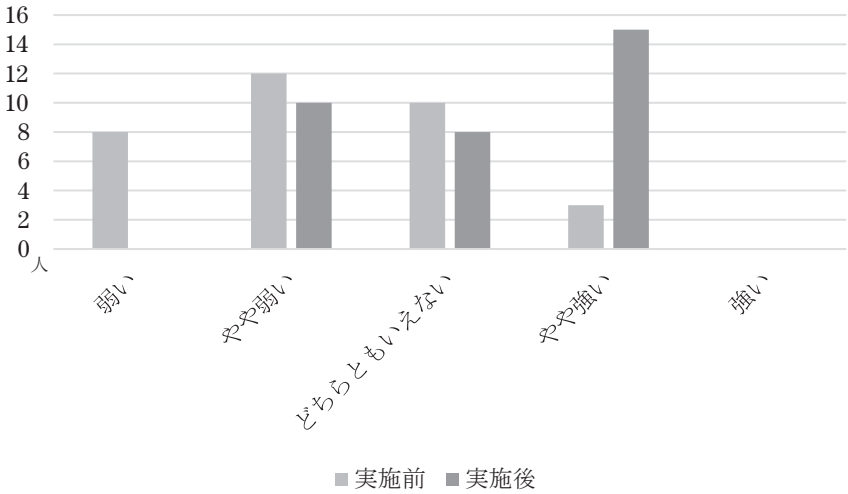
5 印象に残った出来事について話すことができる。



図表 17

相手方のプレゼンテーション後には、強く印象に残ったトピックについて感想を尋ねられるため、体験を積むことによって自信を得て、「やや強い」が多くなったと思われる。

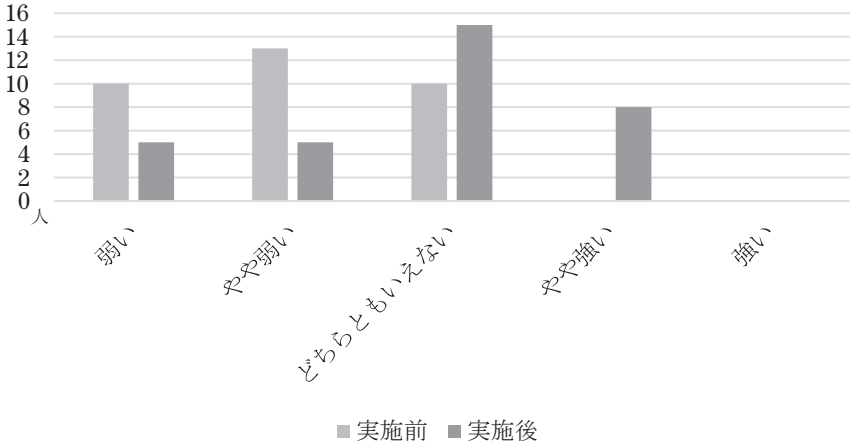
6 日常生活の身近な状況について話すことができる。



図表 18

交流中、フリーカンバセーションでは自分の生活、例えば大学生活の過ごし方やアルバイト先の様子などを話す機会に恵まれたため、「やや強い」が多くなったと思われる。

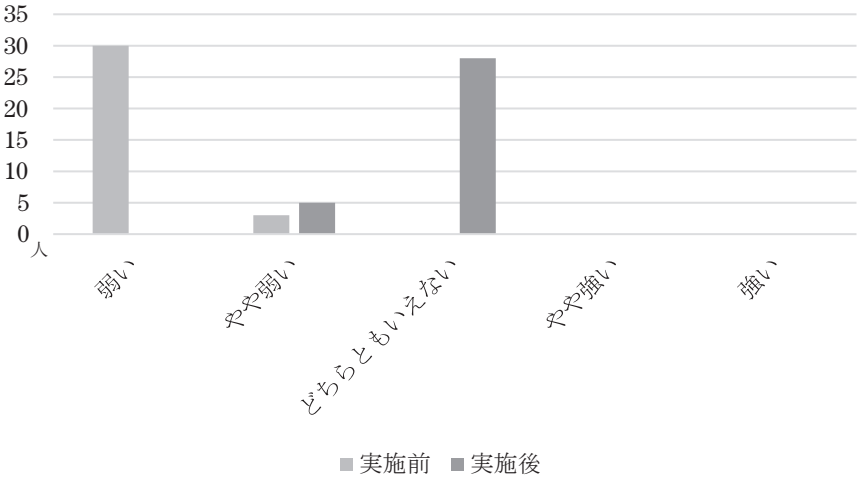
7 相手や状況に応じて、丁寧な表現、くだけた表現が使える。



図表 19

交流相手は皆、大学生であり、対象者と同年代なため、交流中は特に丁寧な表現を使うように指導するはなかったが、それでも「どちらともいえない」「やや強い」が「弱い」「やや弱い」を上回ったことは自信の表れと思われる。

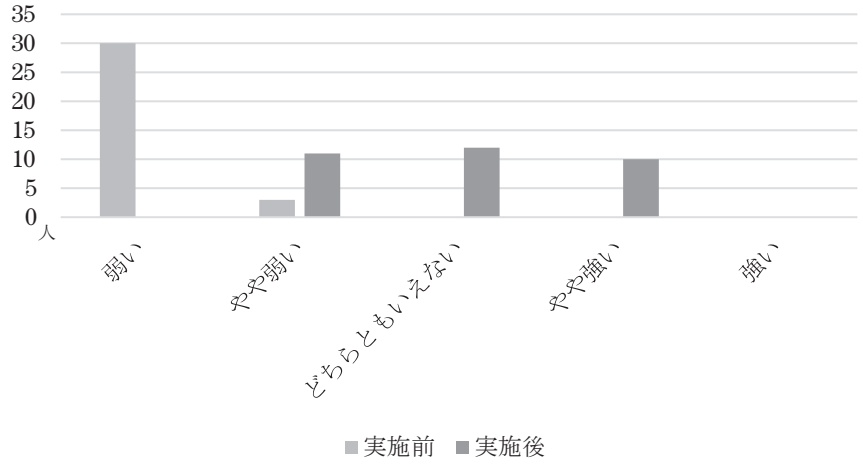
8 会議に出席して議論に参加できる。



図表 20

理想的には、学生間交流で社会問題等について議論することができれば非常に望ましいのであるが、現実的には今回の対象者に議論するに値する英語力は不足しており、従って交流は楽しい会話にとどまった。それでも質問 8 の回答と同様に「どちらともいえない」「やや強い」が「弱い」「やや弱い」を上回ったことは自信の表れと思われる。

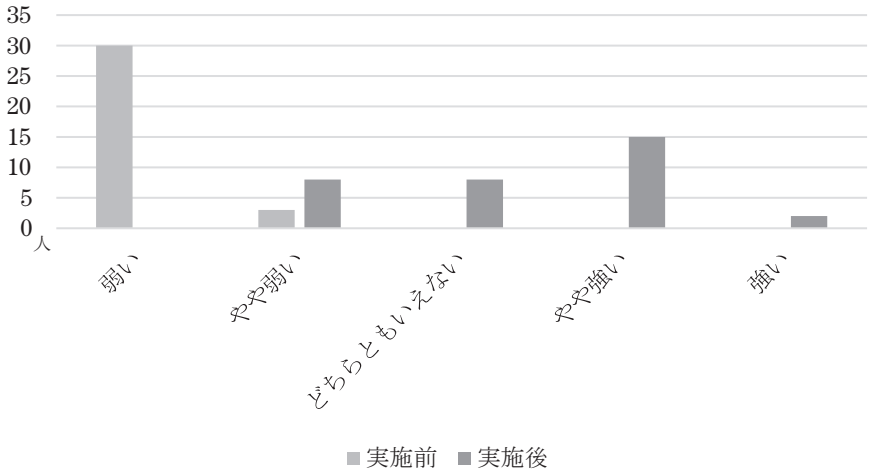
9 日本で起きている社会的な事象について説明したり、自分の考えについて述べることができる。



図表 21

プレゼンテーション中、日本で起きている社会的な事象について紹介し、自分の意見を添えるということを行った体験から、決して易しくはないが自信をつけられたのではないかと思われる。「弱い」が消えたことは評価したい。

10 日本の伝統文化、独自の文化について、相手に分かりやすく伝えることができる。



図表 22

まさに、「日本の伝統文化、独自の文化について、相手に分かりやすく伝えること」は交流の目的の重要な一つであり、この体験の積み重ねによって自信を持つことができ、「弱い」がなくなり、わずかながら「強い」も出現したことは評価したい。

分析結果

セルフアセスメント結果についてSPSS STATISTICS 26.0を用い、統計学的に分析を行った。本調査の参加者は33名であることから、まずは正規分布が仮定されないノンパラメトリック検定による対応のあるサンプル検定を採用し、交流前のSA平均点と交流後のSA平均点の差（図表23）、および交流前のSA合計点と交流後のSA合計点の差（図表24）が統計的に有意であるかを検討した。その結果、全ての質問項目において交流前後の平均点および合計点の差は有意であることが分かった。

交流前SA平均点と交流後SA平均点の比較（ノンパラメトリック検定）

質問項目番号	交流前後	度数	平均値	標準偏差	*Z*	*p*	
1	交流前	33	2.85	0.755	-5.476	0.000	***
	交流後	33	3.97	0.585			
2	交流前	33	2.58	0.936	-5.131	0.000	***
	交流後	33	3.91	0.579			
3	交流前	33	2.58	0.969	-5.144	0.000	***
	交流後	33	4.12	0.696			
4	交流前	33	2.67	0.645	-5.128	0.000	***
	交流後	33	4.30	0.467			
5	交流前	33	2.18	0.808	-4.479	0.000	***
	交流後	33	3.39	0.864			
6	交流前	33	2.24	0.936	-3.851	0.000	***
	交流後	33	3.21	0.857			
7	交流前	33	2.00	0.791	-3.840	0.000	***
	交流後	33	2.79	0.992			
8	交流前	33	1.09	0.292	-5.304	0.000	***
	交流後	33	2.85	0.364			
9	交流前	33	1.09	0.292	-5.095	0.000	***
	交流後	33	3.03	0.810			
10	交流前	33	1.09	0.292	-5.078	0.000	
	交流後	33	3.27	0.944			

Note . ***: p <.001

図表23

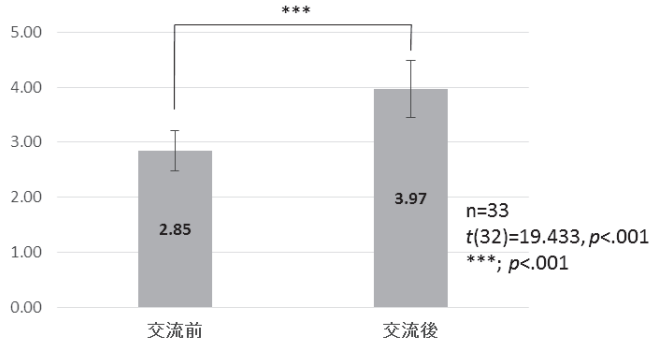
交流前SA合計点と交流後SA合計点の比較（ノンパラメトリック検定）

	度数	平均値	標準偏差	*Z*	*p*	
交流前	33	20.364	5.510	-5.017	0.000	***
	33					
交流前	33	34.848	5.880			
	33					

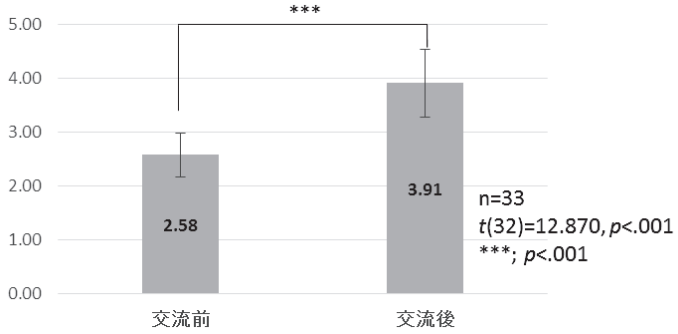
Note . ***: p <.001

図表24

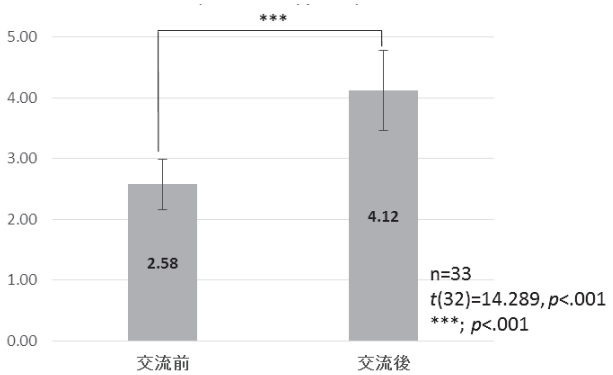
ノンパラメトリック検による検討の結果、全ての質問項目において交流前後の平均点および合計点の差は有意であることが分かったことから、より厳密に検討することとした。SA 調査の各質問項目において、交流前の SA 平均点と交流後の SA 平均点の差が統計的に有意か確かめるために、有意水準 5%で両側検定の T 検定を行った。その結果、各質問項目において交流前後の平均点の差は有意であることが分かった（図表 25～34）。



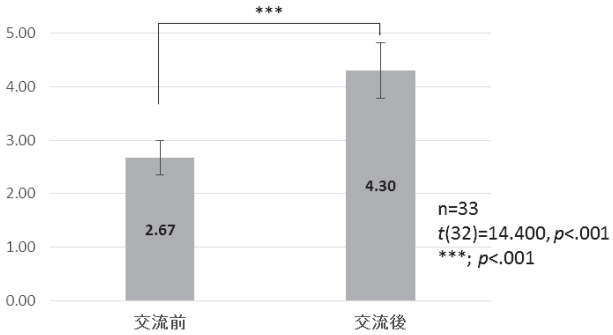
図表 25　質問項目 1（簡単な伝言をすることができる）の交流前 SA 平均点と交流後 SA 平均点の比較



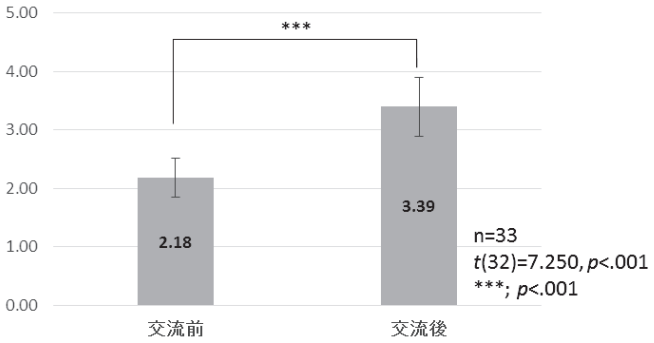
図表 26　質問項目 2（買い物で店員に自分の好みを伝えたり質問したりできる）の交流前 SA 平均点と交流後 SA 平均点の比較



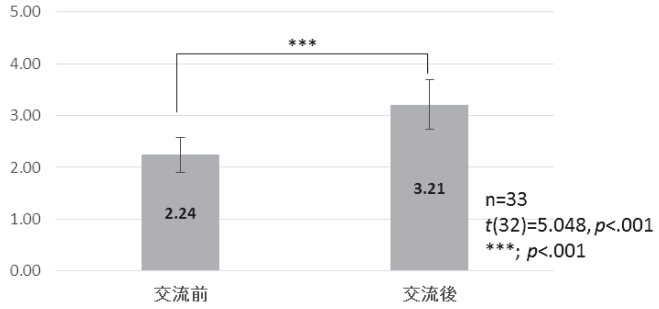
図表 27　質問項目 3（簡単な道案内や路線の案内ができる）の交流前 SA 平均点と交流後 SA 平均点の比較



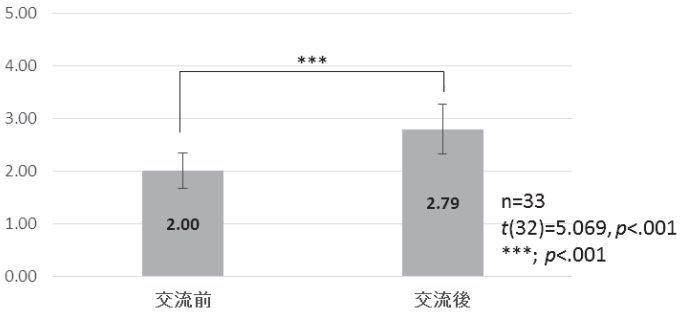
図表 28　質問項目 4（自分について簡単な紹介をすることができる）の交流前 SA 平均点と交流後 SA 平均点の比較



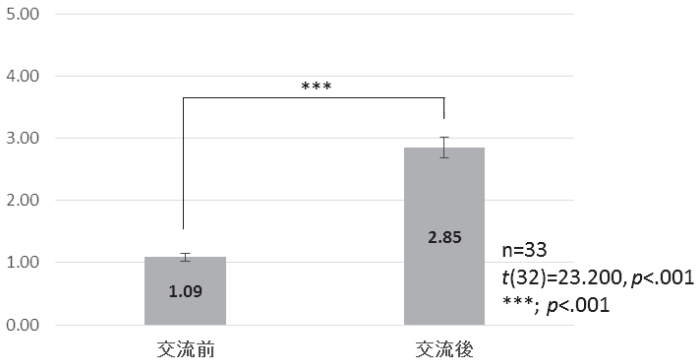
図表 29　質問項目 5（印象に残った出来事について話すことができる）の交流前 SA 平均点と交流後 SA 平均点の比較



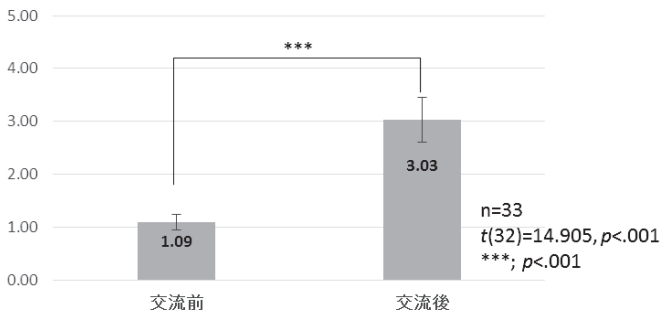
図表 30　質問項目 6（日常生活の身近な状況について話すことができる）の交流前 SA 平均点と交流後 SA 平均点の比較



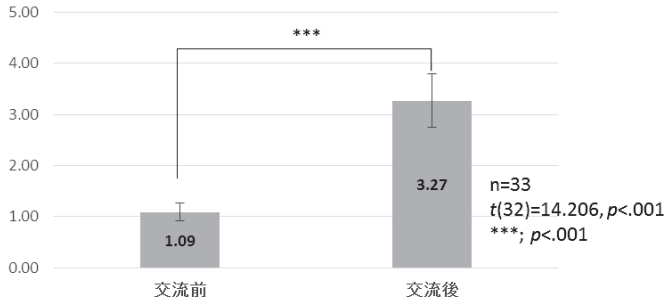
図表 31　質問項目 7（相手や状況に応じて、丁寧な表現、くだけた表現が使える）の交流前 SA 平均点と交流後 SA 平均点の比較



図表 32　質問項目 8（会議に出席して議論に参加できる）の交流前 SA 平均点と交流後 SA 平均点の比較



図表 33　質問項目 9（日本で起きている社会的な事象について説明したり自分の考えについて述べたりすることができる）の交流前 SA 平均点と交流後 SA 平均点の比較



図表 34　質問項目 10（日本の伝統文化、独自の文化について、相手にわかりやすく伝えることができる）の交流前 SA 平均点と交流後 SA 平均点の比較

考察

実施に先立ち、対象者は鵜田（2005）監修の「カタカナ英語汚染度チェック」を受け、自分の発音がどれほど日本語的であるかを知るようにした。質問事項は以下の 12 問である。

1. 私のイントネーションはどちらかという平坦である。
2. 私はなんとなく日本人的な発音をしている。
3. まずは単語や会話表現を覚えることが先決。発音の練習は後からでいい。
4. 前置詞や簡単な単語が聞き取れないことが多い。
5. 辞書に単語の発音がカタカナで書いてあるとわかりやすくてうれしい。
6. match と much を同じように発音している。
7. business の i はハッキリ発音する。
8. concern と possible の o は同じ発音である。

9. bird の ir と card の ar を同じように発音している。
10. sit の i と universe の i は同じ発音である。
11. item の e と objection の e は同じ発音である。
12. my home の 2 つの m は、同じ長さで発音する。

5 つ以上に「該当する」「よくわからない」と回答すると、同氏の診断によれば「ネイティブと会話をしていても通じない、リスニングは苦手、努力の割には成果が乏しい」と厳しいものであるが、対象者で 5 つを下回る者はおらず、平均では 9 つが当てはまった。学生たちが気づいていなかった点は、英語と日本語ではその音が根本的に異なるということである。むろん、音だけでなく、それに伴う口の動き、息の出し方、音と音とのつながり等々、違う点ばかりである。母国語にない音は脳の排他作用が勝手に働き、日本語の音に置き換えてしまう、を繰り返していては、確かに「成果は乏しい」であろう。対象者の脳に日本語にはない音を覚えさせる必要があるので、正しい音を表す発音記号を用いて一から覚え、記号を見て単語を解する訓練をした。

事前の聞き取りによれば、対象者は皆、小学校での英語授業以来、発音等の練習を受動的にも自主的にも特に行ったことはなく、本訓練前に行った短文を読むチェックの際、誰一人も th の発音ができていなかったのも当然といえる。thick も sick も共に「シック」であり、相手に通じるとは思われない。

各人の発音のどこがどのように違っているのか、どのように直せば正しい音に近づくのかをわからせる訓練は、グループ指導と個人指導を並列で行ったが、どちらの場合も鍵となったのは激励、つまりは励まして誉める、の繰り返しであった。特にグループ指導では仲間同士でチェックをし合い、少しでも上達すると褒め合うといった空気を醸成することが肝である。温かい雰囲気の中でこそ、皆のやる気が芽生え、自信を持つことができ、もっと頑張る、頑張りたいとの積極的態度を獲得することができると筆者は結論する。また、差し迫ってフィリピン人学生たちに通じなければ困るのだという現実が、訓練へのモチベーションに繋がったことも間違いない。教員にとってそのような学びの実践の場を頻繁に提供することが必須の仕事である。

まとめ

過去の英語による交流を通して、筆者は担当ゼミの学生たちのプレゼン中、聞き手であるフィリピン人学生たちの反応が止まる場面が少なからず見てきたが、これは日本人的な英語発音が理解できないという理由からであった。日本人学生の英語力はごく平均的で、それまで英語の発音について体系的に教授されたことはなく、自身で特に学ぼうとしたこともない学生たちである。本研究では彼ら一人一人に発音指導することにより外国人には理解されにくいカタカナ式発音から脱却し、フィリピン人学生の理解を得るようになり、自信を得た体験が、英語の発話およびさらなる学習意欲が増すという結果につながった。

対象者は皆、小学校 5・6 年次に英語での外国語活動を体験しており、大学 3 年生になるまでに

少なくとも 10 年余り英語を学んできた計算になるが、彼らの英語力は年月に見合う成果を得ているとはいえない。小学校での英語の時間について感想を尋ねると、一様に「よく覚えていない」「そんなにしゃべっていない」といった曖昧に回答ばかりであった。音声の修得は特に入門時での導入が大切と言われ、多量のインプットを与えるべき非常に重要な時期であるにもかかわらず、対象者たちの言葉からもわかるように、現状では児童たちが英語の音声に触れる機会も発声する機会も共に十分ではない。2018 年度からは外国語活動が 2 年、前倒しされ、それまで中学校で学んだ内容が小学校で学ばれるようになったが、この変更がどれほどの効を奏するのか、答えを知るにはもうしばらく時間がかかるのであろうか。ちなみに、交流相手のフィリピンの学校教育は国語を除いて全て英語による。結果として、学生たちはネイティブレベルの英語を苦も無く操っていることを付け加えたい。

謝辞

交流の実施、成功は在セブのヴィサヤ大学の皆様、とりわけアンナ・カブエナス先生とアイリーン・コスタス先生のご尽力によるものであり、お二人には心底より感謝申し上げる。

引用・参考文献

鵜田豊（2005）『英語のリスニングは発音力で決まる』ジャパンタイムズ pp.3-4

大津由紀雄・窪園春夫（2008）『言葉の力を育む』慶應義塾大学出版会

窪園春夫（2005）『音声学・音韻論』くろしお出版

竹林滋・斎藤弘子（2008）『英語音声学入門』大修館書店

藤尾美佐（20111）「日本人学習者の流暢性に関する縦断的調査」*JACET-KANTO Journal,7*

Nagasaki, M., Orimoto, S., & Armitage, K.（2019）The conditribition of noticing and self-modification through repetitive oral output to second language learners' monologic speaking performances. *JACET-CSCRB, 6*